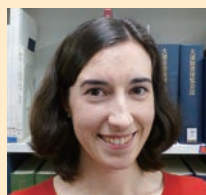


能を披露したりすることはない。しかし、日本の中高年の民衆は大胆で、自分の生活を豊かにすることに長けている。ここまでの活動を見てきて気づいたのは、観衆もまた多くは現地の中高年の人々であるということだった。しかし、その後、専門的な上演団体である国指定無形民俗文化財の相模人形芝居の上演がスタッフによってアナウンスされると、あっという間に観衆が増えたのだった。団体は、悲しげな愛の物語を上演した。私は日本語はわから

なかったが、その節回しと人形の表現に心を動かされた。

今回の訪問中に、特に二宮尊徳に関する調査を通して、私は日本の無形文化財の保存について直接理解することができた。その上で、中国の非物質文化遺産と比較してみると、大きく啓発された。例えば、日本では無形文化財を博物館や記念館と結び付けている。あるいは、文化財保護において民間の力を発揮している、などの点はどれも中国が参考にし、学習すべきだと思う。

## 19世紀後半から20世紀初頭の日本の歴史を探索する



キリ・ヴェメテ  
(ブリティッシュコロンビア大学)

私は主に韓国の歴史を研究していますが、日本の歴史、特に19世紀後半から20世紀初頭の歴史を知ることは私の研究にとって非常に重要であり、日本の外交的あるいは国内的な歴史の理解がなければ、当時の韓国の状況を十分に理解することはできません。また、ブリティッシュコロンビア大学のアジア学科の博士課程学生として、自身の研究に直接関連するかどうかは別として、いつか私も教えられるよう、他のアジア諸国の一般的な歴史は知っておくべきだと思いました。日本の歴史については、いくつかの課程を取りましたが、今年まで私の日本での唯一の経験は、観光客として一週間できるだけ多くの観光スポットを巡ったのみであり、日本と日本の文化に対する理解は単に一般教養的なものでしかありませんでした。

そして今年、私は非文字資料研究センターの支援を受け、18日間日本に滞在し、調査をする機会を得ました。この研究調査旅行での目標は以下の通りでした。



写真1 1936年9月版 緑旗表紙(日本人入植者が韓国で刊行していた定期刊行物)

- ・20世紀初頭に韓国に住んでいた日本人女性に関する資料を収集する。
- ・19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋の女性はどういったかかわる資料を集める。
- ・私の研究に関連する場所を視察し、一般的な日本の歴史をより深

く理解する。

これらの目標の達成に向けて、まず文書を収集することに決めました。日本での2日目、国立国会図書館で1930年代のマイクロフィルムと当時の定期刊行物を調査しました。外国のアーカイブである米国のユナイテッドメソジストアーカイブセンター、イングランドのチャーチルアーカイブセンターで研究を行った経験はありましたが、英語以外の言語でアーカイブを調べるのは初めての経験でした。私をサポートしてくれた神奈川大学の学生たちは、とても貴重な存在でした。図書館での滞在は長時間になったにもかかわらず、彼らは献身的に、また忍耐強く手伝ってくれたので調査はとてもはかどり、横浜開港資料館でも同様のサポートをしてくれました。

資料の収集とは別に、日本にある程度長く滞在できるこの機会を利用し、私の研究に視覚的な背景を持たせようと思いました。どのようなテーマでも研究者が実際に歴史的イベントの発祥地を視察し、どのようにその場面



写真2 銀座和光時計台(1932年建造)



写真3 鎌倉の大仏、19世紀後半（左）と現在（右）

が見えただろうかという心象を構築することができれば、そのテーマをより深く理解できるということは一般的によく知られた事実です。そのため明治時代に建てられた都内の建物（東京駅、明治神宮）や1930年代に造られた場所（銀座、お茶の水大学）を訪ねました。また、19世紀後半に訪日した西洋女性旅行者の話に登場する横浜の場所にも行きました。その場所はウォーターフロント沿いの遊歩道と外国人居住地で、英語で「ザ・ブラフ」と呼ばれていました。

今回の研究調査旅行の最後として、私は鎌倉を訪れ、鎌倉時代に関連する場所や19世紀後半の西洋人の観光

旅行地であった場所も探索しました。その後、現存する江戸時代の侍家（武家屋敷）を見学するため佐倉市に赴き、最後に、江戸時代末期に造られた商店街を体験し、それを大正時代にできた類似の街と対比するために川越へ行きました。神奈川大学の学生（チューター）の協力を得て国立歴史民俗博物館も見学しました。魅力的で見事に陳列されたギャラリーをじっくり見学し、カナダで一般的に教えられているような日本の歴史とは大きく異なる歴史を新たな観点から学ぶことができました。また、外国人の視点ではなく、日本人自身がどのように自分たちの歴史を見ているかを理解することもできました。

博物館には日本の民俗文化に焦点を当てたギャラリーもあったので、日本に長期滞在しないと見られない日本文化の基礎的な部分も僅かながら学ぶことができました。

非文字資料研究センターの親切な支援のおかげで日本に滞在した18日の期間に研究に必要な資料を収集し、この研究の視覚的、地理的コンテキストを探索することができました。日本の歴史を学び、日本の日常を体験することもできました。

この経験は私がアジア研究で博士号取得を目指す上で、大きな助けとなることと思います。ありがとうございました。

## 身体で理解するということ



加瀬丹野ジュリアナ  
(サンパウロ大学)

遠くブラジルから日本に来ることは、地理的に移動するだけでなく、時間を移動することでもある。

時間の移動には、昼から夜だけでなく、季節の移動もある。

違う環境にいるという感覚は、自然だけでなく、歴史や文化にも関連する。



横浜市 久良岐能舞台

視界の変化は、表面的なものだけでなく、実体のない主観的なものでもある。

横浜の神奈川大学非文字資料研究センターが提供する交換プログラムに参加し、2018年冬のあいだ滞在を延長する決断をしたことで、私は実際に自分で経験することでしか得られない様々な知見を得ることができた。人生における出来事の意味を見いだすという意味での経験<sup>(1)</sup>は、知的、学問的分野にとどまらず、身体全体を使った理解にも及び、その身体には感覚と心と感情も含まれる。

特に日本文化について学ぶ場合、ヨーロッパ発祥の科学的思考がルネッサンス以降（14世紀半ば以降）たどってきた道筋とは全く異なる、物の理解と知覚の方法があると知ることが重要である。科学的論理が価値を持つためには合理的なものと感じ的なものを分ける必要がある